D 67

被服行動での色彩嗜好の認知過程に関する研究
その１．被服行動と色彩嗜好の国際比較（日・米・欧）

梅花短大　○　家本　修　　ノートルダム女子大　押山　八重子

［目的］　被服の選択行動をもたらせる因果関係と行動生成過程を明らかにするために調査実験をおこなった。本報では、色彩嗜好において被服行動特性との関係、被服色彩嗜好（春秋）との関係について欧・米・日の差異について検討を行ったので報告する。

［方法］　調査対象：京都Ｎ女子大の１８歳～２３歳の女子大生２１０名。アメリカのマウントメリー大（北部）・メリーランド大（東部）・マックニース大（南部）の３大学の女子大生１９４名。ヨーロッパは、ドイツのケルン語学学校の全欧からの女子学生２９名である。調査時期：１９９１年６月～７月。調査方法：各地域とも、集合調査法による質問紙調査。調査項目：自己評価（ＳＤ法・７段階評価法による２７項目）、被服行動に対する態度（リッカートタイプ・５段階評価法による２４項目）。色彩は、日本色研の６５カラーチャートを使った。色彩は、好色嫌色順位、秋着用好色嫌色順位、春着用好色嫌色順位を直射日光を避けた昼光屋内でチャートを選択させた。欧米調査用質問紙は、英文に翻訳後、ネイティブスピーカーと討論を加え、意味の統一化の検討をおこなった。

［結果］　①米国内は全体で差異が認められなかったので一群にした。②好色嫌色は春秋とも着用好色嫌色に一致しない。③好色は日本はペールトーン、米国はビビッドトーン、欧州ではダークトーンとビビッドトーンであった。④被服行動は、米国は着用に関しては積極的であり、欧州は流行や新奇性に関しては保守的でる。日本はより中庸的である。日本は、セクシーさに関しては寛容的である。④性格評価では、中庸的な日本に、評定値に高低差のある米国、項目により日本と米国側に振れる欧州という傾向がある。